
零の先に存在しない者

黒神しゃち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零の先に存在しない者

【Nコード】

N4547P

【作者名】

黒神しゃち

【あらすじ】

ノーマル アブノーマルスペシャル マイナス
普通、異常、特別、過負荷。

これが現在認知されている箱庭学園生徒のカテゴリーである。

しかし、光あるところに影ありと言っべきか、もう一つの存在が暗躍しようとしていた。

普通に近く、普通に遠く。

異常に近く、異常に遠く。

過負荷に近く、過負荷に遠く。

プラスとマイナスどちらにも属さない零番目がいた。

いや、いなかった。

なぜなら零番目である彼ら彼女らは^{アンノーマル}非存在だからだ。

第零箱内話 プロローグ

「イーマル アブイーマルスペシャル マイナス
普通、異常、特別、過負荷。」

これが現在認知されている箱庭学園生徒のカテゴリーである。

現在箱庭学園では過負荷の代表的存在、球磨川楔くまがわみでぎによる全異常抹殺作戦（

これを異常の代表的存在、生徒会長黒神めだかは『生徒会戦拳』と呼ぶ）を展開中。

しかし、光あるところに影ありと言ふべきか、表の戦拳中に暗躍する過負荷が発見された。

我々は正史の安定を図る為、暗躍者を殲滅する。我々はそれぞれ様々な思いを持ち集った面々であるが、目的は一つ、安寧なる最後と安静たる終焉が為。では、行くぞ」

と、アホ毛に至るまで態度の大きい女が宣言した。

「・・・えーと、拍手？」

と、純白髪の少年が控えめに拍手した。

「いやいやいやいや。俺らそんなに大きな目的で動いてねーから。大体なんだよそのいかにもそれっぽい感じ。出オチにされるぞ」

と、漆黒髪の少年が呟いた。

「だめですよ。そんなことを言つては」

と、眼鏡を掛けた少女が注意した。

「確かに、私達のような存在が動くに当たつての因果律への言い訳はこれくらいが妥当でしょう」

と、長身の青年が冗談めいた口調で言った。

「ほならさっさと行こか。待ちくたびれたんや」

ニコニコしている青年がうながした。

「・・・って、お前はこつちの陣営じゃねーだろーがっ！」

「あ、バレた？ ほなお先ねー」

「逃げたか、追いかけるぞ！」

「はい！」

「了解です！」

「年寄りには辛いですねえ」

ノーマル アブノーマルスペシャル マイナス
普通、異常、特別、過負荷。

これが現在認知されている箱庭学園生徒のカテゴリーである。

しかし、光あるところに影ありと言つべきか、もう一つが存在が暗躍しようとしていた。

普通に近く、普通に遠く。

異常に近く、異常に遠く。

過負荷に近く、過負荷に遠く。

プラスとマイナスどちらにも属さない零番目がいた。

いや、いなかった。

なぜなら零番目である彼ら彼女らは非存在だからだ。
アンノーマル

第一箱内話 灰色少年

「善吉！今日も校内見回りをするぞ！」

「それはわかったから更衣室にまで入ってくんな！」

箱庭学園校舎内、一年生教室前廊下にて。

「いつも善吉に見られているからな。今回は見る側に回ってみよう
と思ったのだ」

箱庭学園生徒会長、黒神めだかは尊大に言った。

「俺がいつも覗きしてるみたいに言っくな！てかその発想の逆転はおかしい！」

そしてその台詞に生徒会庶務、人吉善吉がツツコミを入れる。

概ねいつも通りである。

「そもそも風呂まで一緒に入った仲だ、別に隠すところもあるまい」

「あるわ！かなりあるわ！」

「きゃ！」

「む？」

ばさばさと紙が大量に落ちる音。少し前を歩いていた女子生徒が、
運んでいた書類の山をこぼした音だ。

「善吉よ、助けに行くぞ」

「ん？ ちよつと待てめだかちゃん」

善吉がめだかを引きとめる。すると、

「大丈夫ですか？」

と少年が駆け寄った。

少年は女子生徒と共に書類を拾い集め、きちんと揃えて渡した。

「これで全部ですか？」

「あ、うん、ありがとう。これで全部だよ」

「それはよかったです」

「うん。じゃあありがとね」

がんばってくださいね、と少年は女子生徒を見送った。

「なかなか感心な奴ではないか」

めだかは少年の見送るポーズを真似しながら少年に話しかけた。これは幼馴染である善吉をも驚かすめだかの得意技(?)だが、

「あ、生徒会長さん。こんにちは」

と、少年は普通にめだか達を振り向いた。

(こ、コイツ、めだかちゃんの登場で驚かないだ?!?)

善吉は割合本気で驚いた。

少年の外見でまず目を引いたのは、髪の毛だった。

くすんだ銀色のような灰色という不思議な髪色だった。

少年は中性的な容姿をしており、輝くような笑みを浮かべていた。

「はじめまして、僕は真白影原零一ましろかげはられいちと言います。一年二組だよ」

「ん?隣にしちゃ見ない顔だけど・・・」

「そう?僕は結構見てたよ。人吉君も、黒神さんもね」

「・・・」

早くも善吉が交流を深めている中、めだかは零一を見つめたまま黙りこくっていた。

「ん?どうしためだかちゃん」

「ん、いや、なんでもない。よろしく頼むぞ真白影原同級生」

「真白だけでいいよ。先生でも大体そうだから。それに、僕としてもそっちの方がいい」

「そうか。では真白同級生。先ほどの人助け、ご苦勞であった」

「大したことはしてないけどね」

「いや、することに意義があるのだ」

「あはつ。それじゃ、僕はそろそろ行くね。『またどこかで』」

「!」

「おう、じゃあな」

休み時間の人ごみの中に消えていく零一を見送った後、善吉は何かを考えているめだかを振り向いた。

「何があつたんだ、めだかちゃん」

「わかったか？善吉」

「いや、よくわからないがめだかちゃんの様子がおかしかったんでな」

「・・・変なのだ」

「変？」

「私は真白同級生に見覚えがないのだ」

「めだかちゃんが？」

一度見ればある例外を除いて忘れることがないというめだかかの記憶力を知る善吉にとっては信じられないことであった。

同じ学年のこと、さすがに今までで一度くらいは見たことがあるはずだろう。

「それと、最後の「またどこかで」という言葉が重なって聞こえたのだが、これはさすがに幻聴だろう」

「そうか。とにかく、それはまた今度調べようぜ」

「ああ、そうだな。見回りを続けるぞ」

「・・・危なかった、ばれかけたよ」

『気付いてねーから大丈夫だったの』

「君が悪いんだよ」

『はん、俺だつて挨拶くらいしたいんだよ』

第二箱内話 委員長少女（前書き）

一話一話がだらだら長くてすみません（涙）

第二箱内話 委員長少女

「・・・あ」

善吉が机を覗き込み、小さく声をあげたのを半袖は聞き逃さなかった。

「んー？どしたの人吉ー？」

「いや、教科書忘れたみたいでな」

「次の授業移動教室だから早くした方がいいと思うなー」

「わかってるつての。でも、借りようにも借りるアテがないんだよなあ・・・」

同じ生徒会メンバーの喜界島もがなはスポーツ特待生なので体育の授業が多めだ。

おそらく教室にはいないだろう。

「この間の灰髪くんはー？二組だったでしょ」

半袖の言葉に善吉は若干引いた。

「・・・なんでお前が知ってたんだよ」

「前にも言っただけど、人吉が正義の側にいたいなら聞かない方がいいよ」

「そうかよ。まあいい、真白のところへ行ってみるか」

最後は半袖の言うことに従う。これもまた、いつも通りである。

「おーい、真白、いるかー？」

二組の教室を見回すも、零一の灰髪は見当たらなかった。

「やばいな・・・アイツいないのか・・・」

「背後から失礼しますが真白君をお探しですか？人吉さん」

「あ？」

振り向くと、言葉通り善吉のちょうど背後に、眼鏡を掛けたいかにも真面目そうな少女が立っていた。

髪はポニーテールにまとめられており、それでも少し長いようだった。

た。

「委員長キャラ登場だね」

「おい不知火、見た目で判断するなよ、失礼だぜ」

「はっ！人吉がまともなこと言ってる！」

「うるせえよ！」

「私は万字マンジといいます。一年二組の学級委員長です」

「ホントに委員長だったのか・・・」

「はい。真白君のお友達でもあります」

「へえ。ってか、さっき俺の名前呼んだけど何で知ってた？」

「人吉さんは有名人ですから。あ、黒神さんのファンの中で人吉賛成派と反人吉派が争ってるみたいなので気をつけた方がいいですよ」
「マジで!？」

善吉は近頃感じていた視線の正体がとんでもないものであることを知った。

て言うか、ファンクラブの存在も初耳である。

「あひゃひゃ　ウチのクラスにもいるから背中に注意した方がいいよー？」

「おちおち居眠りなんかできなくなっただな・・・」

まあ闇討ちを返り討ちにする自信くらいはあるのだが。

「ところで真白君ですけど、今はいませんよ」

「へ？そうなのか？」

「教科書ならお貸しますよ。ちょっと待っててくださいね」

「え？あ、ああ・・・」

「何で人吉が教科書借りに来たってわかったんだろっね？」

「あ、人吉君」

善吉が首をかしげているところに、零一が現れた。
心なしか髪の色が黒がかったような気がする。

「どうしたの、こんなところで」

「ああ、お前に教科書を借りに来たのはいいんだけど、お前がいなかったから、」

万に借りることにしたんだ」

「それはごめんね。それより、字とも友達になったみたいだね」

「まあな。アイツには命の危機を救われたかもしれない・・・」

「・・・教科書で？」

「色々あつたんだよ」

「色々？あ、僕真白影原零一。よろしくね、不知火さん」

「よろー」

笑顔で握手をする二人。

「おっと、他人と馴れ合っちゃだめだ、人間強度が下がっちゃう」

「わざわざ他作品から引用してくるなよ！」

「私達から見れば先輩にあたる人だしね ツッコミのスキルは人吉を越えるという超人！」

「弟子入りするといいよ人吉君」

零一は目を輝かせていた。どうやら読者だったようである。

「いや、感動するところじゃねえよ、絶対」

と、善吉がツッコミを入れたところで、字が帰ってきた。

「お待たせしました。お帰り、真白君」

「ただいま」

「ありがとな」

「いえ、気にしないでください。これでよかったですよね」

「確かにこれだけど、よくわかったな」

「予想とか得意なんです。そろそろ時間危ないですから早く行った方がいいですよ」

「うお、ヤバイな、行くぞ不知火！」

「不知火さんならもう行ったよ」

「な！？」

善吉があわてて走っていくのを見届けると、字はため息をついた。

「・・・何やってるんですか、『あなた』は」

「・・・やれやれ、どいつもこいつもうるせーな。いいじゃねえか
ちよっとくらい」

「向こうに知られたら厄介です。控えてください」
「ちえー」

第三箱内話 変態？青年

珍しいことに、生徒会室に真黒がやってきた。

「紹介するよ。彼は咎瀬優介^{とがせゆうすけ}。この度僕の助手になったんだ」

そう言つて真黒が連れてきたのは、長身の青年だった。

おとなしそうな顔立ちをした、所謂美青年である。

手足が細長い上に、決して小柄ではない真黒の背と同じくらいある。

「どうも。紹介いただきました、咎瀬優介と申します」

青年はどこか冗談っぽく言つて、ぺこりと頭を下げた。

「真黒さんの助手、なあ・・・」

善吉はちらとめだかを見た。

「・・・うむ」

めだかも善吉を見返した。

「「変態だろうな・・・」」

失礼すぎる見解だった。

しかし真黒が筋の通つた変態、つまりド変態である以上、その説は侮りがたい。

大体真黒の私室に入ることができるということは、相当の変態が相当の精神の持ち主である

ことに間違いない。

「確かに黒神さんはド変態ですが、私まで変態にされては困りますねえ」

またも冗談っぽく肩を竦めて見せる。

「はっはっは、優介君、冗談言っちゃダメだよ。君だって変態じゃあないか」

ばしばしと肩を叩くが、ド変態をスルーしたわけではない。

真黒は自分が変態であることに誇りを持っているから当然だ。

「だって、君がここに来たのは妹さんを探すためだろう？妹探して三万里。素晴らしいじゃないか」

「三万里!？」

「いろんな所を歩き回ってるみたいなんですよねえ。と言っても、私は大半道に迷っていただけですが」

「迷いすぎだろう!？」

めだかがツツコミを入れた。

かなりのレアものであることは言うまでもない。

「ああああああ!！」

そして真黒は血の涙を流さんばかりにしてシャッターチャンスをやんだ。

「ところで、妹を探してるって言ったよな」

聞きながら真黒の涙の洪水を避ける。

「ええ、そうですが」

「ならば私達も手伝おうではないか」

「ふむ?」

凜!という効果音と共に、めだかは宣言した。

「咎瀬助手の妹探しに、生徒会を執行する!」

「いえ、どれだけ探しても多分アイツは見つかりませんよ」

「は?」

「少し前に届いた手紙に『箱庭学園つてところに編入しようと思います。』」

場所?もちろん教えません!ていうかここどこ?」

みたいなことが書いてあったので、まだついてはいないでしょう」

「兄妹揃って方向音痴!？」

「先回りしたんですけど、よく考えたら先回りしたところでアイツが来るまで何も

することがなかったんですよ」

「そこを僕が拾ったのさ・・・」

げっそりとした真黒が復活した。

「やれやれ、アイツに会えると思ったらいつの間にか箱庭学園の前にいた自分が怖いですよ」

変態ではないがかなり変態的ではあった。

「というわけで、今はあの部屋に泊めていただいてるんですよえ」
「・・・」

いや、とんでもない精神力を持った変態だった。

第三箱内話 変態？青年（後書き）

少々グダって来ましたね、ごめんなし（涙）

第四箱内話 尊大女（前書き）

遅くなりました。 ひっじょーに遅くなりました。
そして今回特に長いです。
ごめんなさい。

第四箱内話 尊大女

「さて、こんなもんかなつ、と」

ふう、と首にかけたタオルで汗を拭く。

善吉は絶賛野良仕事の最中だった。

事の始まりは昼休み、善吉が食堂で昼ごはんを食べていた時の話。今日もラーメンを『飲み』、から揚げの骨から肉を『舐め取り』、サラダを『流し込んでいる』半袖に、周囲の生徒は引いていた。

むしろおびえていたりもするが、そんなことはお構いなしである。善吉はそのそばで普通にカレーを食べていた。

「なあ不知火」

「どしたの人吉？このシチューはあげないよ」

「シチュー欲しがってる訳じゃねえよ。話があるんだ」

「もしかして告白？」

「どうも今日はボケが過ぎるな。元気いいな、何かいいことでもあったか？」

「人吉こそ引用なんてらしくないけどねー で、何の話？」

「いや、最近よく人と知り合いになるんだけどさ、いろいろ変なんだよ」

「変？」

「ああ。この前の真白とか、二組の委員長の万とか。何かこう、変な感じがすんだよ」

「へー」

「それで、お前なら何か知ってるんじゃないかと思ったんだ」

半袖はコーンスープを一瞬で飲み干し、善吉に向き直った。

「あひゃひゃ 人吉らしくもないなあ、そんなこと言うなんて」

「でも、あのめだかちゃんか『変だ』って言ったんだぜ？」

「んー、でも、あの背の高い咎瀬って人も含めて経歴も全然変なところは無いんだよねー」

「そうか・・・」

何故会っていないお前が咎瀬さんを知っている、なんてことを善吉は言わない。

二人の付き合いは薄いながらそれなりのことは分かり合えている。

「そのようだな」

めだがが、はあ、とため息をついた善吉のポーズを斜め後ろできっちり真似をしていた。

めだかの得意技(?)は本日も好調のようだ。

「・・・めだかちゃん、いい加減使い古しじゃねえか？」

「何の、まだまだいける。それより、真白同級生達のことなのだが」

「何かわかったのか？」

「いや、何もわかつてはいないのだが、関連かも知れない出来事だ」
「？」

「それは私のことか？」

善吉の首をかしげたポーズを、アホ毛まで何故か偉そうな女が真似をしていた。

ここまではめだかと一緒なのだが、問題は立ち位置だ。

思い切り真正面である。

だから善吉達はその尊大なるアホ毛を観測することができたのだが、どうも本人達の問題はそこには存在しないようだった。

「な、あ、アンタは・・・!」

善吉が戦慄する。まさか、しかし、何故ここに・・・!?

「ふっ、決まっているだろう」

女はぱつと前髪を掻き揚げる。

ものすごく尊大な態度だ。

「私の可愛い従姉妹を愛でるためだよ、我が義弟よ」と。

ここに女こと黒神帆立くろかみほたては現れたのだった。

黒神帆立。

黒神めだかとは従姉妹の関係にある、社会人の女である。

容姿はめだかとかかなり似ており、違いはその髪黒さと服装くらい。その髪は影のごとく、闇のごとく深い漆黒をたたえている。

実家である黒神とは別に会社をいくつも経営するやり手の女社長、の、はずなのだが、

その性格はとてつもなく尊大で、商談の時も数々の社長に逆に頭を下げさせてきたという強者だ。

「不知火の爺に少々意見を言ったらすぐに『生徒会の特別顧問にする』と言ったのだ」

「その意見とは？」

「この食堂は味がまいちだな、ウチの社員達に子供を入れるなと忠告せねば、といった感じだな」

「それはいちゃもん以外の何者でもねえ上に質がこれ以上ないほど悪い！」

場所は変わって生徒会室。

いつの間にか運び込まれていたやけにゴージャスなソファに座る帆立と、何故か正座させられている

善吉、そしていつもどおり生徒会長の椅子につくめだかの三人がいた。

半袖は忽然と姿を消していた。なお、食器はちゃんと片付けられていた。

「しかし、何故ここにこられたのです？会社の業務はどうしたのですか？」

というめだかの質問に、

「だからお前達を愛でに来たと言っている。ところで善吉義弟。お前、ちよつと畑を作つて来い。

私達はこれからポーズの研究をする」

と、返した。

「何から何まで勝手だな！秩序も順序もねえ！」

「ふむ？脱ぐのですか帆立姉様？」

「めだかちゃんも乗るな！さっきまでしてた会社の心配はどこへ行った！」

「特別顧問である私に逆らうのか？文句を言つと私の乳を揉ますぞ」「史上最悪の刑罰だ！」

小さなころから面倒を見てもらっていた姉的存在の胸を揉む。

「非常に背德的だな」

「自分で言つてりや世話ねえよ・・・」

善吉は非常に疲れていた。

もうツツコミを入れる気力さえない。

「爺に味が悪いと言つた以上、言つた私が改善せねばならない。というわけでいい有機野菜を頼んだぞ」

とんでもない責任転嫁だった。

「私の責任はお前の責任、お前の責任はお前の責任」
ジャイアンニスム
「剛田主義・・・」

とまあ、こんなわけで善吉は絶賛野良仕事である。

第五箱内話 挨拶も終わった事だし（前書き）

かなあああああり、遅れましたが、やっと話が進みます。

第五箱内話 挨拶も終わった事だし

善吉が畑を耕し、めだかが従姉妹と戯れ、その他さまざま事態が動き出したその日の放課後。

いや、一見普通の「そこ」に時間軸は存在せず、まさに彼ら彼女らだけの空間。

そこ、つまり「生徒会室」には計4人の人間がいた。

「・・・」

難しい顔をしながらパズルを組んでいる少年、真白影原零一。

「・・・」

無言で本を読んでいる少女、万字。

「・・・」

珍しく黙って携帯電話をいじる青年、咎瀬優介。

「・・・」

もっと珍しく黙って目をつぶっている、いや、実は静かに寝ているだけの女、黒神帆立。

そんな時間がいつまで続いたか、沈黙を破ったのはこの一言。

「・・・もうだめだー、我慢できーん・・・」

帆立の寝言だった。

「・・・一体どんな夢見てるんですかね」

零一のいぶかしげな一言。

「・・・多分、誰か襲ってる夢じゃないですか」

続く字の興味なさげな一言。

「・・・確かにそれっぽい台詞ですよねえ」

携帯を閉じ、いつもの微笑みを戻しながら優介の一言。

「・・・さて、そろそろ動くかな」

「「！」「」

先ほどまでの爆睡具合が嘘のように、帆立は立ち上がった。

「『挨拶』もすんだ事だ、行くぞ同志達よ！いざ、戦いの舞台へ！」

その一言に対する返事は無論。

「「別に同志じゃないですよ」「」

第五箱内話 挨拶も終わった事だし（後書き）

次からちよつとずつ話が進みます。

そう遠くない内には戦拳に入る予定！。

第六箱内話　・・・いやいやいや

『やあ過負荷のみんな』

『僕は球磨川^{くまがわみそぎ}袂』

『多分知つてのとおり・13組のリーダーをやらせてもらってるんだ』

『今日メールをしたのは他でもない』

『君たちにやってもらいたい事があるんだ』

『って、こんな漫画よろしくの台詞じゃつまらないかな?』

『おっと、忘れるところだった』

『やってもらいたい事を説明するね』

『君たちには』

『これから始まる生徒会戦拳で起こりうる『可能性』を潰してほし
いんだ』

『具体的には援軍や邪魔が入ることだね』

『ただし『これは有り得ない』って可能性だけだ』

『予想外も想像の範疇』

『少年漫画の最終決戦で魔王と勇者の戦闘中に他のモンスターは乱入してこないだろう?』

『そう言うことだよ』

『じゃ、よろしくね』

『あ、そうそう』

『あくまで『可能性』を潰すだけでいいからね』

『あまり表立った行動は避けてくれよ』

『いや、裏立った行動かな?』

『じゃ、今度こそ頼むよ』

「・・・いやいやいや」

「? どうしたんですか?」

「このメール、一斉送信なんだ」

「だから何ですか?」

「俺の知る限り、ここにある他のアドレスは俺がかなり苦手な奴らだと思っただが」

「へー、先輩アドレスだけで人を覚えられるんですね、携帯いらず

「じゃないですか」

「携帯はいるっつーの。問題はさっきの台詞の後半だよ」

「かなり苦手な奴ら、ですか？」

「ああ」

「先輩、基本人間だったら誰でも嫌いじゃないですか」

「それは人見知りっつーんだよ・・・確かにそうだけど。でもそういう意味じゃなくて、だ」

「つまり？」

「策師はくしちゆうにとっちゃあ苦手な部類ってことだ」

「？」

「『読み憎い』奴らなんだよ、ったく・・・球磨川の旦那も人がわりい、何で曲者ばっか
まわして来るんだろうな。この有り得ない可能性つてのもわけわからんねーし」

「罪悪ですか？」

「あ？なんだそりゃ」

「最悪のさらに上です」

「そんな言葉があつたのか・・・くそ、時代はどんどん先に行くなあ」

「ま、考えるのは後にして。とりあえず、行きましょうよ」

「・・・いや、どこへだよ」

第七箱内話 自分の足で見つけろ、と

「そもそもどこに行くつもりなんですか、帆立さん」

「私が手に入れた情報は『箱庭学園内で暗躍する過負荷がいる』だけだ。つまりっ」

「自分の足で見つけろ、と」

「そういうことだ。察しがいいな万」

「まあ、そんなことだろうとは思ってましたけどねえ」

「とにかく探すぞ。戦拳中にも関わらず校内にいたらそやつがターゲットだ」

「そう簡単に見つかるとは思えないですけど・・・」

「そつえば、今日は初戦でしたねえ。誰が戦うのでしたっけ？」

「庶務戦で、人吉君と球磨川先輩ですね」

「庶務戦で球磨川が出ているのか。奴は会長戦かと思ったのだが」

「昔から庶務をやってみたかったそうです」

「とりあえず、陰ながら応援するよ、人吉君」

とまあ、こんなことを話しながら。

4人は誰もいない校舎内を歩き回っていた。

1年1組から13組の教室、2年1組から13組の教室、3年1組から13組の教室。

さて次は特別教室、と言ったところで。

廊下を一人、青年が歩いていった。

だるげな目に薄い茶髪、一目で箱庭学園のものではないとわかる制服。

明らかに不審人物だった。

「どうしたのだこんなところで」

「あの、すみません。出口、どこかわかりますかね？」

「ああ。わかるぞ。しかしどうした、こんなところで。見たところ他校の生徒のようだが」

「あー、はい、後輩がここに侵入したらしい猫を探すのを手伝えつつーんで付いてきたんすけど、その後輩ともはぐれましてね。迷子なんすよ。だから外に出てようかなと」

「ふむ、そうか。よし、なら私たちもその猫を探そうではないか。おいお前たち……」

む？どうしたそんなに身構えて。何かいたのか？」

「いたって言うか現在進行形です」

「何だと！？くっ、私ともあろう者が気づかないとはっ！どこだ！」

「……」

「何だ同志たちよ、何でそんな残念そうな目で私を見る」

「……鳥頭」

「……さすがにこれは予想していませんでした」

「……ですねえ」

「何を呟いている、それより敵だ、一体どこにいるんだ」

「そりゃあ多分俺のこつたな」

「む？」

「俺だよ。アンタの目の前の俺だ」

青年がにやりと口だけ歪める。

同時に、近くの階段から、窓の外に逆さに、廊下の曲がり角から、すぐ隣の教室から。

それぞれ一人づつ姿を現した。

「どーも初めまして。俺たちは箱庭学園・13組の生徒です」

第八箱内話 晩ご飯キツくなりますもんね

「過負荷・・・だと」

帆立の目が目の前の青年を鋭く見据える。

「ああ、俺達が過負荷の暗躍部隊さ」

青年は相変わらず口元だけを吊り上げて笑っている。

「って、先輩！何いきなりバラしてんですか！」

「いいんだよ、これも策うけだからな。それに、物事にはタイミングつてもんがある。

タイミングは大事なんだぜ？」

「確かに・・・おやつ食べるタイミング間違えたら晩ばんごはんキツくなりますもんね」

「・・・まあ、間違っではないが」

「・・・んー？」

青年は先ほど階段から降りてきた少女の言葉にそつと頭を抱えた。

4人の方を向いた少女は首を傾げていた。

そして小さく「あ」と言い、

「・・・ってゆーか、兄貴じゃないですか。久しぶりですねっ」

優介に手を振った。

優介も手を振り返し、

「ええ、そうですね遊紀。ところで、あなたはそっち側なんですか？」

と穏やかに返した。

「そうみたい」

「そうですか、なら」

「お互いぶつからないことを祈りましょう」

「くくくっ・・・」

「ふふふっ・・・」

「こ、怖い・・・」

零一は普通じゃないオーラのものをまとった優介と遊紀の会話に若干引いた。

同時に、何か妙な違和感を感じていた。

兄妹だというのが、明らかに「それ」とは違う感覚。

とは言え、それとは違う違和感はもともと感じていた。

「これが、過負荷」

「ソウデスコレガマイナストイウモノナノデス」

棒読みどころかまともに言葉を発しようとしていないような声。

フラットすぎて男か女かすらわからない。

その声は廊下の曲がり角から声だけ聞こえる。

「その声、とても美しいとは言えませんが、どんな声帯してるんでしょうね」

不機嫌そうに呟く隣の教室から現れた青年と、

「実はどちらでもいいのですが私はそうは思いませんね」

心底どうでもよさげに窓の外に逆さにぶら下がる少女。

ご想像のとおりパンツは丸見えである。

それさえどうでもいいのだろう。

かくして。

4人の非存在は5人の過負荷に宣戦を布告し、

5人の過負荷は4人の非存在に宣戦を布告した。

第九箱内話 へ？

「なあ」

「はい？」

廊下。しかしそこは箱庭学園ではなく、赤い柔らかな絨毯が敷かれた高級なホテルのそれだった。

その廊下を歩く学生服とセーラー服の2人。

「さっきの『あれ』、なんだろうな」

「へ？」

「いや、なんか流れてケンカ売っちゃったけど、俺あいつら何者なのか全然知らねーんだよ」

「……………ええええ！？い、いいんですかそれ！？」

「まー大丈夫だろ。俺達の標的は『有り得ない可能性』。あいつら、選挙管理委員の目をすり抜けて校内にいたんだろーし。どんな影響を及ぼすかわからねえ。ま、それは俺らもだが」

「結局猫ちゃん見つかりませんでしたよ先輩」

「知るかよ。冗談っぽく言ってみたけどよ、本当に猫を追って来たなんてあいつら信じてねえだろうな」

「えへへ」

「褒めてねえから。にやつくな」

「へへ・・・違いますよ、兄貴の事です」

「あ？ああ、あの背の高いニコニコ兄ちゃんか？」

「はいです。兄貴に久しぶりに会えましたから、ちょっと嬉しいんですよね」

「ふーん・・・お前ブラコンだったっけ」

「自信持てますね」

「そこまでか」

「でも」

「ん？」

「でも、私は」

「私は？」

「兄貴が怖くて仕方がない」

それまで浮かんでいた笑顔はいつの間にか消え。

その顔に浮かんでいたのは紛れもない、純粹な程の恐怖だった。

「咎瀬さん、妹さんがいたんですね」

「ええ、そうですよ。言ってませんでしたっけ？」

教室。しかしそこは箱庭学園ではなく、『箱庭学園の教室』だった。思い思いの席に座り、思い思いに過ごす4人。

「そもそも僕はアイツを追って箱庭に来たんですが。まさかこんな形で会っちゃうとは思いませんでしたねえ」

「そうだったんですか」

「真白君、君にも何か目的があるんでしょう？教えてくれませんかねえ？」

「僕の目的？僕なんかより字や黒神先生の方が気になりますけどね」

「・・・私の目的は調整」

「調整？万さん、貴方、『調整者』だったの？」

「違います。でも、調整の為に動かなければならない。ただ、やはり対人演技は苦手です」

「そうかな？なら普通にしゃべればいいのに」

「調整には必須の条件だから」

「目的をしゃべる事も必須条件、というわけですかね」

「肯定」

「ふむふむ」

そんな雑談の途切れ目を狙ったかのように。

「……ん？」

「や。決して盗み聞きではないですよ？ずっとここにいましたし」

それは『現れていた』。

第十箱内話 ふああああ・・・（前書き）

もう少ししたら書き方も落ち着くかなあ・・・

第十箱内話 ふああああ・・・

「ちわっす」

音もなく、影もなく、存在もなく。

それはそこにいた。

教壇の上に、立っていた。

行儀が悪い。

その場の全員一（寝ている帆立は除く）は思った。

「・・・あー、みなさん。落ち着いて。談笑を続けてくださいよ。これじゃあ

私がおかしたみたいじゃないですか」

ま、何かはしたんですけど。

にはっ、とそれは笑った。

「とりあえず自己紹介をしましょう、それがいい。
私は韃走たそうしゅういわし。一応普通です。

今回あなた達の戦争の審判をする事にしました」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「おやおや、何も反応してくれない。どうしょ、もしかしてこれはラフメイカー現象？」

「・・・質問を。なんで『ここ』に僕たち以外がいるんですか？」

「何かしたからです」

「僕からも。貴方、何者ですかね？」

「鞘走いわし。一応普通です。趣味は悪質なイタズラで、弱点は胸とお腹です」

「戦争に審判はいりません」

「いりますよ。少なくとも、私の暇つぶしにはなりますあ、いや、嘘ですそんな目をしないください、興奮するじゃないですか

「さて、一通りしゃべり終わりましたが。全然警戒を解いてくれな

「・・・ん？ああ、まだしゃべる事がありました。

「今こつちに過負荷チームの一人が向かってます。今日中に戦っちゃってください。

「それでは私は審判しに行きますので。ではではっ」

「！消えた？」

「最初に入ってきた時と同じ」

「しかし、聞き捨てならんな」

「おや、黒神先生。いつの間に起きておられたので？」

「さっきだ。過負荷がこっちに向かっている。つまり我々はそれを迎撃しなければならない」

「それにしても、あの人は過負荷側にも行ってコンタクトを取ったみたいですね」

「そして説得し、ここに向かわせた」

「それで、どうしま」ふああああ・・・」

「む、お目覚めのようだな」

「・・・みたいですな。『ああ、起きたぜ。つっても話は聞いてたが』」

「ならいいね。じゃ、今回は僕らだけで行ってきます」げ、マジだよ。俺寝起きだぜ？」

「ああ、任せたぞ、真白『影原』」

「はい『けっ』」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4547p/>

零の先に存在しない者

2011年10月7日20時35分発行